みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

感性と制度の多様な結びつきを探究する＜共同研究：感性と制度のつながり：芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, しらべ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009501

感性と制度の多様な結びつきを探究する

文　緒方 しらべ

乖離したままの感性と制度

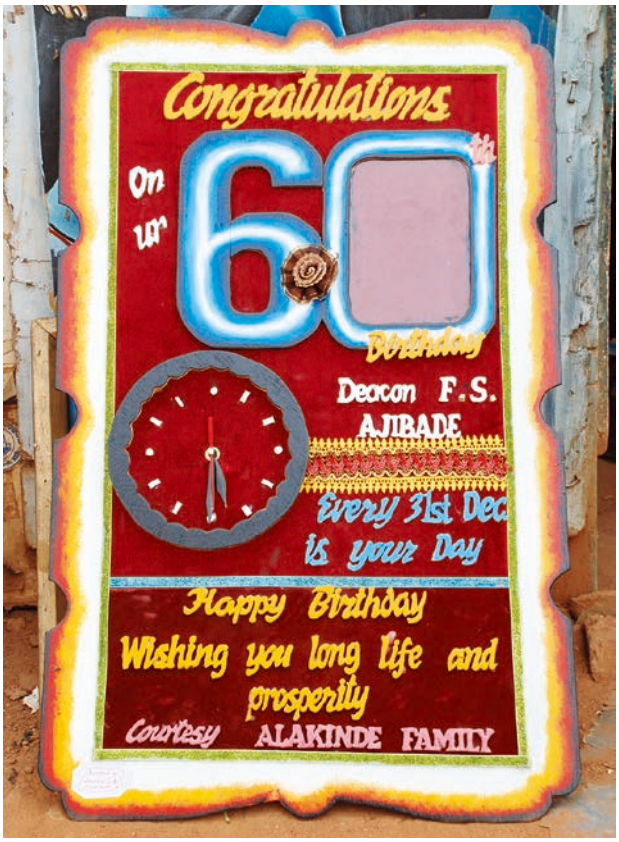
これまでの芸術の人類学は、感性についての議論と、制度をめぐる議論の交点に正面から向き合うことがなかった。1980年代以降は、美や芸術を普遍的概念として扱うことへの疑義から、ローカルな実践とグローバルな制度の不均衡な力関係を問う制度論が隆盛した（Clifford 1988ほか）。他方で、1990年代末からは、物質文化研究、物質性の研究、エージェンシー論に基づき、モノの働きや人・モノ・コトの連鎖や相互生成に焦点を当てる生成論が注目されている（Gell 1998ほか）。しかし、前者が問題とする「審美的判断」や「評価」と、後者において連鎖の働きに寄与する「喚起」や「魅惑」がどのように結びついているのかは、十分に検討されてこなかった。そこで本共同研究は、乖離した両議論を踏まえた上で、人・モノ・コトの連鎖の一部を成す感性や感覚・身体的経験と、特定の時代・地域の慣習やグローバルな芸術・政治・経済を含めた制度がいかに結びつきながら相互に生成し、変容しているのかを検討していく。その際、古今東西の絵画や生活造形、景観、音楽など幅広い表現実践を対象とし、これらが芸術以外の観点や制度からも枠づけられることに注意を払いたい。

感性と制度をつなぐ、とは

なぜ今、感性と制度をつなげて考える必要があるのだろうか。おもに2つの理由がある。1点目は、1980年代以降の制度論に基づく芸術研究の閉塞状況を打開するためである。制度論がたとえ非西洋の芸術に焦点を当てようとも、圧倒的な支配力をもつグローバルな美術制度にのっとった作品制作、販売、流通が主流をなすことに変わりはなく、芸術は所詮アートマーケットの力に支配される（制度的に決定される）と言われることも多い。ローカルな実践をどれほど細やかに記述しても、グローバルな美術制度の大きな枠組みから抜け出すことはできないという見解のもと、制度論に依拠する芸術研究は袋小路に入り込んでいる。

これに対し、1990年代以降は、ジェル（Gell 1998）やデスコラ（デスコラ　2018）に代表されるように、西欧近代に成立した「美の観念」や「芸術＝文化システム」（Clifford 1988）などの制度的議論から距離をおくアプローチが出てきた。モノがどのように芸術作品になるのかという制度的側面を問うのではなく、あくまでも芸術の社会的機能を明らかにすることを、人類学の仕事とする立場である。しかし、暮らしのなかにある芸術や人びとの表現実践は、グローバルな美術制度に加え、地域の慣習や政治・経済制度など多様な制度と緊密に結びついている。さらに、人びとの芸術実践は、芸術の作り手や受け手の感情や情動、身体的な感覚や感受性、創意といった広義の感性とも切り離すことはできない。そこで本研究は、実践において広義の感性を集合的に共有させる枠組みや、独創性・感受性の違いを顕在化させる枠組みを含めた、芸術をめぐるさまざまな制度とその生成プロセスに着目する。そのうえで、こうしたさまざまな制度やその生成プロセスにおける諸存在の相互変容をも明らかにしていくことをめざしている。

2点目は、1990年代以降、制度的領域と、人・モノ・コトの連鎖の一部を成す感性や感覚・身体的経験が不可分に結びつく芸術実践が、さまざまな地域や分野で顕在化している



誕生日を祝うメッセージカード（板）。アキン・オジョ作。ベニヤ板、布、紐、鏡、アナログ時計、約60センチメートル×40センチメートル（2014年2月、イレ・イフェ、緒方しらべ撮影）。

緒方 しらべ（おがた しらべ）
大阪大学外国語学部非常勤講師。専門は文化人類学、アフリカ地域研究。著書に『アフリカ美術の人類学―ナイジェリアで生きるアーティストとアートのありかた』（清水弘文堂書房 2017年）がある。

ためである。2019年夏のあいちトリエンナーレをめぐる議論は、両者の不可分な関係性と理論的視座の必要性を示す一例と言えよう。本共同研究で対象とする幅広い表現実践においても同様である。

たとえば、筆者の調査地であるナイジェリアの地方都市イレ・イフェでは、一部の人びとのあいだで、アーティストに注文して購入するメッセージカード（誕生祝い、結婚祝いなど）を贈る慣習がある。それはしばしば、下書きの文字が見えていたり、糊がはみ出していたり、カード本体の厚紙やベニヤ板がまっすぐにカットされていなかったりと、筆者には若干雑な工作のように見えることがある。しかし、イレ・イフェには、カードを作るアーティストがいて、カードに高い金額を支払う人や受け取る人がいて、居間に飾られたそれを見る家族や訪問者がいる。部分的、あるいは全体的に、彼らのあいだで共有されるカードの価値と喜びや誇りのような感覚的なものがある。それは単なる商業的デザインや使用目的・価値が明白な贈与交換財ではなく、アーティストの個性や創意と依頼者の趣向や予算のあいだでその都度生まれる作品である。こうした価値や感性・美的感覚に支えられた実践はローカルなアートの制度と共に、上述のグローバルかつ支配的な美術制度ともつながっている。

フィリピン出身のアーティスト、キドラット・タヒミックのプロジェクトにも、感性と制度のつながりを見ることができる。本共同研究構成員の兼松芽永（女子美術大学）の研究対象である、日本の地域アートプロジェクト「大地の芸術祭」で2009年に制作された作品は、世界遺産となったフィリピンの棚田の小屋を、新潟の棚田に移築したものである。第二次世界大戦で日本軍が最後まで立てこもった地にあった小屋は、同じ棚田の作り手との新たな交流の始まりを告げる「戦後のラブレター」として贈られた。これは、職人たちの身体感覚や技、戦中・戦後のフィリピンでの出来事、ユネスコというグローバルな景観評価制度、日本の地方創生施策における意義づけと助成金獲得など、時代や国・芸術や政治領域が交差し連鎖することで、新たなモノゴトや制度が生成し、変容してゆく状況を示す事例である。このように、感性と制度を切り離して考えることができないケースが現に存在している。

キドラット・タヒミックの作品（戦後のラブレター（イフガオの棚田から新潟の棚田へ、愛をこめて））
（2009年8月、新潟県十日町市下条、兼松芽永撮影）。

人類学者、キュレーター、考古学者が協働する

本共同研究は、人類学者5人、キュレーター3人、考古学者2人の10人で構成している。芸術の実践現場で地域連携や幅広い企画展示・教育普及に携わるキュレーターが加わることで、近年活発になっている人類学と現代アートにおける協働実践や、広範な参加者との協働プロセス、成果の展示や発表のあり方、それらをめぐる評価基準についても、具体的な課題を提示できるだろう。さらに、芸術を所与のものとせず、多角的に議論をすすめるため、考古学者にも加わってもらった。古墳時代や弥生時代の造形物や景観から問うことができる当時の感性や制度のあり方は、同時代の表現実践や制度的議論を相対化する上で重要な視座になる。いわゆる芸術作品と、モノ・モニュメント・景観などの線引きができない昨今の芸術実践の状況を踏まえると、近代的「芸術」概念の成立以前の造形と当時の人びとの身体感覚・感性や制度との関係を通して、現在の芸術のあり方について考えることは意義深い。

このように、本共同研究は、隣接分野と協働し、芸術の人類学においてこれまで乖離していた感性と制度をつなぐ試みを通じて、同時代の多様な芸術実践を探究する新たな視座の提示をめざしている。

参考文献

デスコラ, P. 2018「形象化のアトリエ」下山大助訳, 秋道智彌編『交錯する世界　自然と文化の脱構築―フィリップ・デスコラとの対話』pp. 305-332, 京都：京都大学学術出版会。
Clifford, J. 1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge (Mass): Harvard University Press.
Gell, A. 1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford: Clarendon Press.